ウクライナ避難民

心の傷 長期ケアを

ハンガリーで日本の医師ら支援

過酷な体験 悲嘆癒えず

ロシアの侵攻を受けたウクライナの隣国ハンガリーで、日本の医療チームが避難民らの支援に当たっている。活動開始から1カ月余り。戦火を逃れるため故郷を追われた過酷な体験から心の不調を訴える人も少なくないといい、チームに加わった医師は「長期的な視野に立ったケアが必要だ」と訴える。（1面参照）

「長時間の移動で疲れた。頭痛がする」「久しぶりに食事をしたら吐いてしまった」。ウクライナとの国境沿いに位置するハンガリー東部の村、ベレグスラーニー。学校施設内に作られたトレーラーハウス型の仮設診療所には、毎日15人ほどの避難民が訪れ、症状を訴える。

3月下旬に現地入りした岡山県の医師、吉田純さん（49）によると、診察した多くの避難民に風邪の症状や持病の悪化がみられた。電車やバスでの長時間に及ぶ移動や、歩き続けたことによる極度の疲労が原因という。

避難中に食事や水分を十分にとれず、脱水症状に陥っていたというケースも少なくない。避難前に悪性リンパ腫と診断されていた患者が発熱し、フランスのレスキューチームを通じ地元病院への救急搬送を要請したこともあった。

吉田さんは、世界各地に拠点を持つ国際医療援助団体「AMDA」（岡山市）と途上国の医療・農村開発などの支援を行う非政府組織（NGO）の「TICO」（徳島県吉野川市）が結成した合同チームのメンバー。3月上旬からの1カ月余りの間に、医師や看護師ら約10人がハンガリーに入り、他国の医師らと24時間体制で避難民の医療支援に当たってきた。

仮設診療所には診察台など基本的な医療設備があり、必要な医薬品は各地から集まる。食材も地元住民から寄せられ、物資類の支援が絶えることは無かった。

一方、懸念されるのがロシア侵攻による過酷な体験を余儀なくされた避難民の心理的負担だ。けがもなく健康そうに見えても「高齢の両親を国に残してきた」などと明かし、心の不調を訴える人もいるため、診療所にはカウンセリングを担う地元の心理士も配置されていた。

「祖国が破壊され、家族を失ったり、安否が分からなかったりといったストレスの大きさは計り知れない」。吉田さんは相手の手を握りながら通訳を介して話に耳を傾け、子どもに折り鶴を折って和ませるなど、心の健康のサポートに努めた。

かつてTICOのザンビア事務所の現地代表を務め、貧困や病気に苦しむ人々に寄り添いながら途上国支援に取り組んだ。今回の医師派遣に参加したのも「日常を奪われ苦しむウクライナの人々のために、自分にできる分野で貢献したい」と考えたからだ。

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）によると、ウクライナから国外避難した人は4月16日時点で480万人を超え、このうち約45万人がハンガリーに避難した。疲れ切った表情で症状を訴える人々の診療に当たった経験を振り返り「ふるさとや家族、友人を失った悲しみが簡単に癒えることはないだろう」と話す。

約2週間の滞在を経て、今月上旬、新たに派遣された仲間に後を託して帰国した。「今後も現地で連携したスタッフと連絡を取り合いながら、長期的な視野に立った支援を続けていきたい」と力を込めた。

3月下旬、ハンガリーの仮設診療所でウクライナ避難民の診療をする吉田さん（手前）＝AMDA・TICO提供